

## 『濤花集』の基礎的研究(二)

市橋 三四子

## 〔抄録〕

『濤花集』には上冊と下冊がある。拙稿「『濤花集』の基礎的研究」において、『濤花集』は昭和四年発行の刊行物であること、その頃に行われた展覧会か何かの大型判の図録であろうと思われること、内容は平安時代や鎌倉時代の古筆の印刷物であること、等を述べた。そして、ここでは『濤花集』を手鑑風に見立て、手鑑や古筆・古筆切についての考察を行い、次に『濤花集』の解題、状況を分析したのであった。

## 一、『濤花集』

## 1、『濤花集』について

『濤花集』について、ここに中村直勝氏(一八九〇～一九七六)の「『濤花集』(恩賜京都博物館発行)」と題した文がある。これは、『歴史と地理』という雑誌の「新刊紹介」の項に載ったものであったが、この文を知ったのが前回「『濤花集』の基礎的研究」を発表した後で

この『濤花集』は、発行が昭和四年(一九二九)であり、今は平成三〇年(二〇一八)である。その隔たりは八九年に及ぶ。そこで本稿では『濤花集』における昭和四年と平成三〇年を、『濤花集』収載の各古筆・古筆切について、筆者名や所在その他種々の観点から、違いや変化を検証、考察を試みた次第である。

キーワード 濤花集、古筆、昭和四年、伝称筆者、現在の所在

あった。しかるにこの雑誌の発行が昭和四年一〇月一日であり、『濤花集』の発行と同じ年であったことから、この文は『濤花集』にとつて貴重な文であり、その資料であると思われる。ここにその部分を紹介し、『濤花集』の説明に代えたいと思う。

先年恩賜京都博物館に於て、「上代様」の假名の特別展観が催されて京洛人士の目を驚かした事があった。私も幾日かをあの陳列棚の前に立つて、飽かずに眺め入った事であった。其の憎らし

いばかりに自由な筆の運びや、其の極めて細心な注意のもとに撰ばれた用紙との諧調、げに入木道の幽玄は茲ぞとばかり讚仰したものであつた。そしてせめて寫眞でもよいからと思うた願求が達せられて、頃日、この圖集「濤花集」——それは古今集の「草木も色かはれともわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」から頭名を採られたかに聞く——を手にして、昔日の禮讚が、今は喜悅となつた。

上下二冊、上冊は尊圓親王、空海、最澄、道風、貫之、佐理、行成、俊頼、公任、忠通、良經、俊頼、俊忠、俊成、西行、爲家、爲氏、經朝以下の能書家二十八人の筆蹟を、或は消息に、或は目錄に、或は秘抄に、或は歌集に、或は懷紙に、或は歌切によりて示したるもので、果して其の筆蹟が所傳そのまゝであるかどうかは、最早吾人の問ふ所ではない。たゞこの妙致に惹き附けられて、理屈を超越してしまへばよい。

其の下冊は本願寺の卅六人集——近頃、この賣却問題から頓に世人の注目を受けた卅六人集である。その内、貫之集、伊勢集、能宣集、赤人集、齋宮集、重之集、元輔集、躬恒集、忠見集、元眞集、忠岑集を収めて居り、就中貫之、躬恒、能宣のものは原色版を以てした所がある。三十六人集が如何に壯麗無比のものであるかは、之によつて窺う事が出来るのみならず、或は永久に傳へる事が出来ようと思ふ。(以下略)

終わりに、「定價不詳(廿五圓かと思ふ) 恩賜京都博物館發行(中村)」とある。

## 2、「濤花集」の基礎的研究」での疑問

前回發表の「『濤花集』の基礎的研究」にはいくつかの疑問があつた。しかしそれらは、この中村直勝氏の文によりそのほとんどが明らかとなつた。

疑問(1) 『濤花集』の銘は、どのようにして命名され、どんな意味で付けられた名前だろうか。

『濤花集』の銘について、中村氏の説明から「古今集の「草木も色かはれともわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」から頭名を採られた」とあり、この和歌は『古今和歌集』巻第五 秋歌下(二五〇)の和歌、作者は文屋康秀(生没年未詳)とあり、解釈は「草にせよ木にせよ、真夏の緑から今ではすっかり色が変わってしまった。しかし、海岸に立つて眺めると、波の花ともいふべき波は相変わらず白いしぶきを上げているから、波の花には秋が訪れないのだなあ」とある。(この和歌の作者については、文屋朝康説もある。)

疑問(2) 『濤花集』が作られ、発行された経緯はどうだったのだろうか。古本屋のご主人の話にあつたように、昭和四年当時にこうした展覧会があつたのだろうか。そして『濤花集』はその展覧会の「図録」だったのだろうか。

これについて中村氏の文から、古本屋のご主人の言われた昭和四年当時、「上代様」の假名の特別展覧が京都博物館で催され、この『濤花集』はその展覧会の「図録」として作られたものであつたといふことが解る。『濤花集』の発行は昭和四年八月五日である。

疑問(3) 『濤花集』の発行部数は何部ほどあり、どのような形で

配布または販売されたのだろうか。

これに関して、中村氏の文では部数については触れられていない。しかし『濤花集』の体裁（『濤花集上』長さ縦三七・八糎、横三〇・二糎、厚さ一・九糎、重さ一・六匁、『濤花集下』もほぼ同じ）から、現在の図録に比べて大きく重い、『濤花集』収載の古筆を原寸大印刷としていること、コロタイプ（collotype）印刷であること等から、大量印刷には適さなかったと考えられ、発行部数はあまり多くなかっただろうと推測する。配布または販売については、「定價不詳（廿五圓かと思ふ）」とあるので販売されたのだろう。とすると、『濤花集』発行の昭和四年当時、「廿五圓」は現在ではどれ位だろうか。中村氏の文の載っている『歴史と地理』（毎月一回一日発行）という雑誌についてみてみると、「定價一冊四拾五錢、郵税壹錢、合計四拾六錢。十二冊五圓四拾錢、郵税拾貳錢、合計五圓五拾貳錢」とある。こうした雑誌の五年分弱ということになり、『濤花集』は当時としては高価なものだったと思われる。

疑問（4）上冊の目次の筆者について、「伝」という文字がないので伝称筆者ではないとし、この小稿では一応真筆扱いにしている。しかし筆者が定められているという事は、古筆家の定めた伝称筆者ということではないのだろうか。または昭和四年当時は全て真筆扱いということだったのだろうか。

『濤花集』においては筆者名に伝称筆者の「伝」は使われていない。『濤花集』における伝称筆者については後の項で改めて考察すること

とする。

疑問（5）上冊目次と下冊収録の順序の違いはなぜ起こったのだろうか。

これについて中村氏の文では特に触れられていない。ということは、印刷時のミスであろうか。上冊目次の家集名と下冊収載の家集とは、順序は異なっているが同じ家集が掲載されている。従って問題なしということだろう。他に、「目次」の四九番目のところで「古筆集帖ノ内」の「（月台）」が抜けている。このように単なる印刷の誤りであったのだろうかと思われる。

疑問（6）上冊は国宝や個人所有の名筆の収録であり、下冊は「西本願寺『三十六人家集和歌』」で占められている。どうしてそのような収録の形をとっているのだろうか。

疑問（7）この『濤花集』下冊には西本願寺本の「貫之集下」と「伊勢集」の両家集の歌が収められている。しかし『濤花集』発行の同じ年、昭和四年にこれらは分割され『石山切貫之集下』と『石山切伊勢集』として現在に至っているようである。従って、この分割は『濤花集』印刷の昭和四年八月以降ということになるか。『濤花集』下冊の発行はこの事とも何か関係があるのだろうか。

この疑問（6）・（7）について、中村氏の説明に「其の下冊は本願寺の卅六人集——近頃、この売却問題から頓に世人に注目を受けた卅六人集」とあり、昭和四年当時、『西本願寺三十六人家集和歌』の

売却問題には、衆人の目が向けられていたのであろう。「先年恩賜京都博物館に於て、「上代様」の假名の特別展観が催され」たことも、それに『西本願寺本』が展示されたことも、売却前の出品の運びとなつたのではないだろうか。また『濤花集』下冊が、『西本願寺本』のみの印刷になっていることも、この『濤花集』の下冊には、問題の『貫之集下』から五葉と、『伊勢集』から八葉が入っていることも、やはり売却問題が絡んでいて、売却前に、他の九人の『西本願寺本』と共に、『貫之集下』と『伊勢集』も『濤花集』に掲載されたのではないだろうか。疑問(7)の『貫之集下』と『伊勢集』が分割されたのが『濤花集』印刷の昭和四年八月一日以降ではないか(発行は同八月五日)ということについても、『貫之集下』と『伊勢集』の作品が『濤花集』下冊に入っているということで、分割前の写真と考えてもおかしくはないだろう。これら一連の事柄については、何らかの形で売却問題が絡んでいたということが裏づけられるだろう。中村氏の文には詳しい説明がないことでもあり、憶測の域を出ないことは言うまでもない。

分割された『石山切貫之集下』と『石山切伊勢集』は、現在は掛軸などに改装されて、各地の美術館や収集家に所蔵されているようである。<sup>(5)</sup>

### 3、『濤花集』の古筆筆者

前出の疑問(4)について、現在では古筆家の「極札」に書かれている古筆筆者名は、信憑性・信頼度はほとんど「ない」といわれる。

今日、古筆切や古写本の説明には「伝誰々筆」とあり、この筆者名は、自筆ではないが、歴史的にその筆者名で伝えられてきたという経緯があり、こうした「極札」に書かれた筆者は、今日では「伝称筆者」と呼ばれている。

すると『濤花集』の筆者名についてはどうだろうか。『濤花集』には筆者名にその「伝」という文字はない。しかし、前出の中村氏の文にも「果して其の筆蹟が所傳そのまゝであるかどうかは、最早吾人の問ふ所ではない」とあるように、伝称筆者ということが想定されていたのではなかっただろうか。従って、『濤花集』の筆者が伝称筆者である可能性は極めて高い。では、なぜ『濤花集』には伝称筆者名が使われなかったのだろうか。

このことについて、小島孝之氏は「成城大学所蔵古筆手鑑『も、ちどり』概要」に、<sup>(6)</sup>

古筆切の筆者名が真実の筆者名を記すものではないということは、今では周知のこと、乃至は常識に属するが、半世紀前には必ずしもそれが常識化してはいなかったのだ、こうした真偽の判断がなされたのは止むを得ないが、その真とする筆者名が何を根拠として判断されたのか分らない。

とある。この論の発表が平成二五年(二〇一三)、その半世紀前は一九六三年、それ以前には「常識化してはいなかった」というのである。『濤花集』発行の昭和四年(一九二九)は、その半世紀前よりまだ前であり、「極札」の筆者名の真偽については「常識化してはいなかった」と見て、「伝称筆者」として明記されなかったのだろうと考える。

## 二、『濤花集』の発行年と現在

### 1、『濤花集』の収載古筆の所在

『濤花集』の印刷・発行は昭和四年八月であり、この『濤花集』の目次に記載されている所蔵者に関しては、その所蔵は昭和四年当時のものとみて差し支えないだろう。とすると、今日ではいったいどのようになっているだろうか。現在の所在を明らかにしたい。

そこで、書道関係の本、『書道全集』（平凡社）、『書道藝術』（中央公論社）、『日本名筆選』（二玄社）、『日本名跡叢刊』（二玄社）等にあたって、掲載されているものを調べていったのだが、全く同じ古筆・古筆切を見出すのに苦慮していた。

そんな時、偶然、この『濤花集』に収載されている古筆切と同じ古筆切の写真を見付けた。それは『小松茂美著作集第二巻』の表紙に続くグラビア写真に掲載されているものであった。この写真の説明文に、「伝小野道風筆 白氏文集巻第五十四「正月三日閑行」断簡〔重要文化財〕一葉 東京・五島美術館蔵」とあり、

鴻池家旧蔵の「古筆大手鑑」に所収される一葉（縦二四・六、横一五・六センチメートル）である。図版がはじめて紹介されたのは、田山方南編『蘭葉集』（昭和十八年四月刊）に掲げられたものである。（中略）極札はないが、小さな紙片に「道風」の二字が認められ、早くから道風の筆跡に擬定されていたようである。（中略）『白氏文集』巻第五十四の「正月三日閑行」の一首で、この一葉は詩題を含む四行からなる。

とあった。これは、『濤花集』の「一二、古筆集帖ノ内白氏文集第五十四 絹地切 小野道風 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵」と同一と判断出来るものである。

とすると、小松氏の著にある「鴻池家旧蔵の「古筆大手鑑」に所収」とあるこの「古筆大手鑑」というのは、『濤花集』記載の「古筆集帖ノ内」の「古筆集帖」のことではないかということに思い至った。そこで、指導教員の黒田彰教授にこの話をしたところ、早速、黒田彰教授ご所有の五島美術館蔵『大手鑑』（大東急記念文庫）の図録を見せて頂くことが出来た。その図録の中に「白氏文集巻第五十四「正月三日閑行」」が所収されていたのである。それは『濤花集』の「一二、白氏文集第五十四 絹地切」と全く同じものであった。

これで『濤花集』の古筆切の中の分からなかった内の一葉の所在が判明した。しかもこの『大手鑑』（大東急記念文庫）には、『濤花集』に掲載されている鴻池氏蔵の「古筆集帖ノ内」とあるもの、「二〇、萬葉集 梅尾切」、「二三、和漢朗詠集切」、「三〇、源順集切 糟色紙」、「四三、拾遺和歌集」、「四四、三宝絵」、「四五、拾遺和歌集」、「四八、後撰和歌集 巻第四之切」、「五七、歌合切」、「六〇、千載和歌集 日野切」、「六二、古今和歌集」、「六三、古今和歌集」、「六四、歌集切」、「六五、和歌 世尊寺経朝」（番号は『濤花集』目次に依る）が掲載されていたのである。つまり『濤花集』の目次にある「古筆集帖」は「古筆大手鑑」のことだったのである。こうして、今まで判らなかった十四葉の所在が明らかとなった。

この『大手鑑』（大東急記念文庫）による判明は、『濤花集』の古筆

を捜すよい手がかりとなった。それは、『濤花集』の目次に「古筆集帖ノ内」とあるのと同じような表記「古筆集帖(月台)ノ内」というのがある。この「古筆集帖」というのが「古筆手鑑」のことであることから、「(月台)ノ内」というのは、「月台」という名の古筆手鑑のことではないかと思われた。そこで手鑑「月台」について調べてみたところ、現在、東京国立博物館に手鑑「月台」(国立博物館所蔵e国宝―書跡 <https://www.emuseum.jp>) が所蔵されていた。その中には『濤花集』に載っている古筆九葉「二六、針切」、「二七、家集切」、「二九、藤原道長集切」、「三五、家集切」、「三九、和泉式部集切」、「四〇、和泉式部統集切」、「四一、後拾遺和歌集」、「四七、後撰和歌集」、「四九、古今和歌集」(番号は『濤花集』目次に依る)も収載されていたのである。

この二つの「古筆手鑑」の出現によって、『濤花集』に掲載されている古筆の二十三葉の所在が判明したことになる。

その後、これら以外の『濤花集』掲載の古筆で、所在が分からなかった古筆についても、インターネットのホームページや『古筆学大成』等から、ほぼ所在が判明してきた。

尚、前出小松氏前掲文の中の「図版がはじめて紹介されたのは、田山方南編『蘭葉集』(昭和十八年四月刊)に掲げられたものである」とあるのだが、この「白氏文集卷第五十四「正月三日閑行」断簡」は、『濤花集』における掲載が昭和四年八月刊であることから、図版としては『蘭葉集』よりも早い時期に紹介されていたことが確認されるのである。

## 2、『濤花集』の発行年と現在の比較

そこで、『濤花集』について、その発行年の昭和四年(一九二九)と、現在の平成三〇年(二〇一八)の違いや変化・移動について見ていくことにする。

古筆筆者名については、先にも述べたように、この『濤花集』の目次の古筆筆者は、その欄に「伝」という文字はなく「伝称筆者」との扱いはない。しかし前述のごとく、伝称筆者であることが認識されている。この点からも『濤花集』の古筆筆者は、現在ではどのように表記されているだろうか。現在の表記を明確にしたい。筆者名表記に「伝」が付されていないものは、現在、真筆または真筆と認められるもの、あるいは定説となっているものである。

所蔵者については、『濤花集』の目次によって昭和四年の発行当時の所蔵者が明らかである。では、現在の所蔵はどのようになっていくだろうか。現在「個人蔵」とあるものは、個人情報保護法(二〇〇三年制定)によっているのだろうか、その氏名が明らかにされていない。

『濤花集』の目次には「古筆名・古筆切名・筆者名・所蔵者名」が記載されている。現在の記載も同じように記し、並べて記すことによって違いや変化・移動を見ることが出来る。目次には番号がないので、適宜番号を附した。(現在の表記については【現】と表す)

『濤花集』  
上冊

一、御物 和漢朗詠集 藤原行成 〔現〕雲紙本和漢朗詠集 伝藤原行成筆 〔古筆学大成第一三卷〕小松茂美著 講談社一九九〇年六月 『濤花集』には「和漢朗詠集」より二葉が断簡として収載、「一ノ二」は「古筆学大成第一三卷」(図一四⑤)、「一ノ二」は同(図一四⑦)。 二、大覚寺法皇衆名单 尊圓法親王 東京帝室博物館蔵	〔現〕御物『大覚寺結夏衆名单』 尊圓親王筆 〔書道全集第二〇卷〕下中邦彦編集 平凡社 一九六六年七月(図版一) 昭和四年当時、東京帝室博物館蔵であったが、現在は御物。	三、国宝 僧最澄入唐請来目録 僧最澄 滋賀県 延暦寺蔵 〔現〕国宝『伝教大師将来目録』 最澄筆 延暦寺蔵 〔書道芸術第一三卷〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九八二年一月(一二三頁) 〔この書は鄭氏の跋尾や他の自署の部分のをのぞいては、最澄(七六六〜八二二)の自筆〕	四、国宝 天台法華宗年分縁起 僧最澄 滋賀県 延暦寺蔵 〔現〕国宝『天台法華宗年分縁起』 伝教大師筆 最澄筆 延暦寺蔵 〔書道芸術第一三卷〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九八二年一月(一六〇頁) 〔最澄が延暦二四年(八〇五)唐より帰国して以後、天台法華宗を弘めようと、重要な関係文書の内容を、天台宗の後のために、自ら整書したもの。〕	五、国宝 空海将来経等目録表 僧空海 滋賀県 宝巖寺蔵 〔現〕重文『紙本墨書空海将来経等目録表』 伝空海筆 宝巖寺蔵 〔書道芸術第一二卷〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(一〇〇頁)
--	---	---	---	--

六、国宝 灌頂歴名 僧空海 京都府 神護寺蔵 〔現〕国宝『灌頂歴名』 空海筆 神護寺蔵 〔書道芸術第一二卷〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(三八頁) 〔空海が草卒に書かれた書。初め神護寺に伝わったのだろう、藤原時代には仁和寺にあり、後、鳥羽の勝光明院に保管、その後、後宇多法皇(一二六七〜一三三四)により神護寺に施入、現在に至る。〕	七、国宝 消息 世二風信状ト称ス 僧空海 京都市 教王護国寺蔵 〔現〕国宝『弘法大師筆尺牘三通(風信帖)』 空海筆 東寺(教王護国寺)蔵 〔書道芸術第一二卷〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(二八頁) 〔空海から最澄宛の消息で、もと延暦寺に伝えられ、巻末の奥書により五通伝来。うち一通が盗まれ、さらに関白秀次の所望で一通切り取られたので、現在三通、東寺蔵。〕	八、国宝 金剛般若波羅蜜経開題残本 僧空海 京都市 神光院蔵 〔現〕国宝『金剛般若経開題残卷』 空海(弘法大師)筆 京都国立博物館蔵 〔金剛般若経開題残卷〕国立博物館所蔵 e 国宝一書跡 (https://www.emuseum.jp) 〔金剛般若経開題の草稿本の断簡と見られ、空海の真蹟が確実視される。神光院旧蔵分の六三行と、この僚巻が奈良国立博物館に三八行分所蔵。他に断簡が諸家に分蔵。神光院旧蔵分はもと醍醐三宝山所蔵、現在は京都国立博物館蔵。〕	九、新撰類林抄 僧空海 京都市 山高五郎氏蔵 〔現〕国宝『新撰類林抄卷第四残卷』 伝空海筆 京都国立博物館蔵
---	---	--	---

<p>〔新撰類林抄〕国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp">https://www.emuseum.jp</a></p> <p>「平安初期に将来した唐風の書跡の一つで唐人の詩篇を草書。断簡は「南院切」と呼ばれ、筆者は空海と伝えるが、唐人の書写の原本より何人かで搦模したものとみられる<sup>10)</sup>」。</p> <p>一〇、文筆眼心抄 僧空海 京都市 山田如陵氏蔵</p> <p>〔現〕重文『紙本墨書文筆眼心抄』 伝空海筆 山田家蔵</p> <p>〔書道藝術第一二巻〕中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(一五〇頁)</p> <p>「この本は空海自筆と伝えられる古鈔本で、もと東寺経蔵にあつたといわれ、明治初年頃山田永年が鑑識し、ついでその所蔵に帰した。現在も同家に伝わる」。</p> <p>一一、北白川宮御貸下 智証大師賜号勅書 小野道風</p> <p>〔現〕国宝『円珍贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書』小野道風筆 東京国立博物館蔵</p> <p>〔智証大師賜号勅書〕国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp">https://www.emuseum.jp</a></p> <p>「少内記在任中の小野道風(八九四〜九六六)が醍醐天皇の命によって揮毫した勅書で、延長五年(九二七)十二月二十七日の年記がある。延暦寺座主円珍(八一五〜八九一)示寂後、智証大師の諡号を授けられた時のもので、原本は中務省に、これは副本として延暦寺別院の園城寺に下賜された。園城寺から北白川宮家に伝来、戦後、国の保有となった<sup>11)</sup>」。</p> <p>一二、古筆集帖ノ内 白氏文集第五十四 絹地切 小野道風 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>〔現〕重文『大手鑑』内『白氏文集』卷第五十四(絹地切) 伝小野道風筆 五島美術館蔵</p> <p>〔大手鑑』(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(四七七)</p> <p>一三、古今和歌集 卷第一 高野切 紀貫之 四日市市 熊沢一衛氏蔵</p>
---

<p>〔現〕『古今和歌集』卷第一 高野切第一種 伝紀貫之筆 三井文庫蔵</p> <p>〔高野切第一種』(日本名筆選一)古谷稔解説 二玄社 一九九三年六月(六〜九頁)</p> <p>「高野切は『古今和歌集』の最古の写本といわれ、書風により第一種・第二種・第三種に分類。奥書により筆者を紀貫之(八七二〜九六六)とするが、三種の書風を同一筆者とするのは不合理、この第一種の筆者は未詳」。</p> <p>一四、古今和歌集 卷第十八 高野切 紀貫之 大阪市 男爵藤田平太郎氏蔵</p> <p>〔現〕『古今和歌集』卷第十八断簡 高野切第三種 伝紀貫之筆 藤田美術館蔵</p> <p>〔高野切第三種』(日本名筆選五)古谷稔解説 二玄社 一九九三年八月(一〇〜一二頁)</p> <p>一五、古今和歌集 卷第十一 本阿弥切 小野道風 京都市 林新助氏蔵</p> <p>〔現〕古今和歌集 本阿弥切 伝小野道風筆 個人蔵</p> <p>〔古筆学大成第一巻』小松茂美著 講談社 一九八九年一月(四一三二)</p> <p>「本阿弥切は本阿弥光悦(一五五八〜一六三七)旧藏品。烏丸光広(一五七九〜一六七三)や畠山牛庵(一五八九〜一六五六)らが、それぞれ所有の巻末の跋文に小野道風筆者説を記している<sup>12)</sup>」。</p> <p>一六、齋宮集 小島切 小野道風 大阪市 男爵藤田平太郎氏蔵</p> <p>〔現〕『小島切本齋宮女御集』 伝小野道風筆 個人蔵</p> <p>〔古筆学大成第一八巻』小松茂美著 講談社一九九一年五月(四二三二)</p> <p>「齋宮女御集』は村上天皇の女御徽子女王(九二五〜九八五)の家集。書写年代は伝称筆者小野道風(八九四〜九六六)より後の一世紀後半と推定<sup>13)</sup>」。</p> <p>一七、古今和歌集 卷第二十 (継色紙) 小野道風 京都市 湯浅七左衛門氏蔵</p>
--

<p>【現】『古今和歌集』卷第二十 継色紙 伝小野道風筆 湯木美術館蔵</p> <p>〔継色紙〕(日本名筆選一三) 鳥谷弘幸解説 二玄社二〇一〇年七月(三四～三五頁)</p> <p>「古来より紀貫之あるいは小野道風の筆と伝称されるが、根拠がなく異筆」。</p>	<p>一八、古今和歌集 卷第十二 藤原佐理 京都市 平井仁兵衛氏蔵</p> <p>【現】『古今和歌集』筋切通切 伝藤原佐理筆 《便利堂刊『蘭葉集』所載》</p> <p>〔古筆学大成第二卷〕小松茂美著 講談社 一九八九年一月(図九九)</p>	<p>一九、古今和歌集 卷第十二 藤原佐理 京都市 松風嘉定氏蔵</p> <p>【現】『古今和歌集』卷第十二 通切 伝藤原佐理筆 五島美術館蔵</p> <p>〔筋切通切〕(日本名筆選一七) 古谷稔解説 二玄社 一九九四年二月(三八頁)</p> <p>「筋切」通切は料紙の文様による違い、これは通切。筆者は藤原佐理(九四四～九九八)あるいは藤原公任(九六六～一〇四二)と伝えらるが、「筋切通切」と同筆の「元永本」(元永三年(一一二〇))とも年代を異にする。源俊頼(一一〇五～一一二九)と伝称するも確証はなく、藤原行成の曾孫定実(一一〇七～一一一九)説が現在有力」。</p>	<p>二〇、古筆集帖ノ内 萬葉集 卷第四 梅尾切 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内『万葉集』卷第四 梅尾切 伝宗尊親王筆 五島美術館蔵</p> <p>〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図三〇〇)</p> <p>「筆者を紀貫之と伝える御物『万葉集』巻四の零本は、旧蔵者の名にちなみ『桂本万葉集』。そのツレの断簡を「梅尾切」と称し、通常筆者は伝源順(九一一～九八三)筆とされるが、この極札には伝宗尊親王(一一二四～七四)筆。しかし今日、筆者は「高野切第二種」と同筆の源兼行(一一〇二～七四)といわれる」。</p>
--	--	---	---

<p>二一、国宝 古詩残簡 藤原行成 京都府 本能寺蔵</p> <p>【現】国宝『本能寺切』 藤原行成筆 本能寺蔵</p> <p>〔藤原行成集〕(日本名筆選四〇) 鳥谷弘幸解説 二玄社 一九九五年三月(二四～二五頁)</p> <p>「題箋に「権跡」(藤原行成(九二七～一〇二七))と書かれ、その下に小さく別人の手で「佐野」とあり所有者を表すとされる。筆者について「本書にはもとより行成とする署名はないが、真筆としての明徴のある高松宮家旧蔵本白楽天詩巻及び関戸家旧蔵消息と同筆であるから行成の筆としてよいもの」。</p>	<p>二二、国宝 古今集断簡 卷第十七 藤原行成 京都市 曼殊院蔵</p> <p>【現】国宝『曼殊院本古今和歌集』卷第十七 伝藤原行成筆 曼殊院蔵</p> <p>〔曼殊院本古今集〕(日本名跡叢刊七) 小松茂美監修 二玄社 一九七七年四月(一一～一四頁、三〇～三三頁)</p> <p>「表紙の題箋に「行成卿筆」とし、奥書にも「行成卿眞筆」とあるが、行成の遺墨と比較して真跡とは言えない。『濤花集』には「曼殊院本」から二葉が断簡として収載、その「二八〇二」の中の「かせふけは：」は流布本(貞応本)には見られない歌」。</p>	<p>二三、古筆集帖ノ内 和漢朗詠集切 藤原行成 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内『和漢朗詠集』(太田切) 伝藤原行成筆 五島美術館蔵</p> <p>〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図四九～五一)</p> <p>「太田切」の筆者は、一般に藤原公任と伝えるが、藤原行成とも称す」。</p>	<p>二四、古今和歌集 卷第十九 (桝色紙) 藤原行成 京都市 湯浅七左衛門氏蔵</p> <p>【現】『升色紙』 伝藤原行成筆 個人蔵</p> <p>〔升色紙〕(日本名跡叢刊五一) 小松茂美監修 二玄社 一九八一年四月(二五頁)</p>
---	--	---	--

「升(楯)色紙」は、清少納言の曾祖父清原深養父(生没年不詳)の家集『深養父集』を書写したもの。藤原行成の筆と伝えるが、一世紀の後半の能書の手と言われる。  
「おもひけむ…」の歌は『古今和歌集』巻第一九(一〇四二<sup>五</sup>)に「深養父」とある。

二五、針切 (集未詳) 藤原行成 名古屋市 関戸守彦氏蔵

〔現〕針切 『源重之の子の僧の集』 伝藤原行成筆 個人蔵

〔針切〕(日本名筆選二五) 島谷弘幸解説 二五社 二〇〇〇年四月(一一頁)

〔針切〕は『源重之の子の僧の集』と『相模集』の二つの家集を書写したもの。この断簡は『源重之の子の僧の集』、筆者は仁与なる人物(人物については未詳)。

二六、古筆集帖(月台)ノ内 針切 (集未詳) 藤原行成 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵

〔現〕重文『月台』内「針切」 伝藤原行成筆 東京国立博物館蔵

(手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <https://www.emuseum.jp>)  
極札に「世尊寺殿行成卿 源重之女集切 針切」とある。  
これは『相模集』(前出「針切」二五社一二七頁)、筆者は「二五」同様、仁与なる人物。

二七、古筆集帖(月台)ノ内 家集切 (集未詳) 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵

〔現〕重文『月台』内「未詳歌集断簡」 東京国立博物館蔵

(手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <https://www.emuseum.jp>)  
極札に「四条大納言公任卿 多万ひて」とある。『古筆学大成第一七卷』(小松茂美著 講談社 一九九二年六月)に「敦忠集(九〇六)九四三」切 伝公任筆」とあり、この歌は『私家集大成第一卷』中古I(明治書院・一九八七年一月)の『敦忠集』一三一(二六七頁)に見られる。続く「すかはら…」は不明。

二八、小大君 御蔵切 小大君 名古屋市 関戸守彦氏蔵

〔現〕小大君集 御蔵切本 伝小大君筆 春敬記念書道文庫蔵及び他は所在不明

〔古筆学大成第一九卷〕小松茂美著 講談社 一九九二年六月  
『濤花集』には「御蔵切」から二葉が断簡として収載。『古筆学大成第一九卷』に「二八ノ一」は「としことに」から「しのひてこよひ」(図一〇二)と、「うりふの、」から「しつ、かきて」(図一〇八)に分割、前半部は「春敬記念書道文庫蔵」、後半部は《尚古会刊「手か、み」所載》。「二八ノ二」(図一〇九)は《法書会刊「書苑」所載》。

二九、古筆集帖(月台)ノ内 藤原道長集切 源俊頼 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵

〔現〕重文『月台』内「師実集切」 伝源俊頼筆 東京国立博物館蔵

(手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <https://www.emuseum.jp>)  
極札に「源俊頼朝臣 霞多徒」とある。『私家集大成第二卷』中古II(明治書院・一九八二年二月)の『師実集』に「霞多徒」の歌は見えない。『古筆名品抄(二)』の同断簡の解説⑯に「御堂関白道長(九六六―一〇二七)の家集の断簡。(中略)一二世紀前半の書写と考えられる」とある。『御堂関白集全釈』にこの詞書と歌⑰(五、霞立つ)が見える。

三〇、古筆集帖ノ内 源順集切 (糟色紙) 藤原定信 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵

〔現〕重文『大手鑑』内「順集」 岡寺切 伝藤原公任筆 五島美術館蔵

〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図七一)  
〔西本願寺本三十六人家集〕の『順集』の断簡。「糟色紙」も「岡寺切」も共に料紙装飾の違いから別名で呼ぶ。これは「岡寺切」、筆者は伝藤原公任。『濤花集』には(糟色紙)、筆者は「藤原定信(一〇八八―一五五六)」とあり、『大手鑑』表記と異なる。『古筆名品抄(二)』の同断簡の解説⑱に「西本願寺本三十六人家集」のうち「順集」から逸脱したもの。(中略)「貫之集下」「中務集」とともに、藤原定信が分担執筆したものとある。  
また『古筆学大成第二七卷』(小松茂美著・講談社・一九八九年一月(六九九頁))にこの断簡の所蔵が「手鑑『毛戦筆陣』所収・五島美術館蔵」とあるが、これは五島美術館蔵『大手鑑』(大東急記念文庫)所収である。

三一、国宝 妙法蓮華經 卷第五 色々紙継 名古屋市 笠覆寺蔵 <b>【現】重文『色紙墨書妙法蓮華經』卷第五<sup>19)</sup></b> 笠覆寺蔵	三二、朗詠集切 色紙下絵 藤原公任 名古屋市 関戸守彦氏蔵 <b>【現】</b> 散書 和漢朗詠集切 伝藤原公任筆 《京都国立博物館刊『濤花集』所載》 『古筆学大成第一四卷』小松茂美著 講談社一九九二年六月(図一 二八)	三三、和漢朗詠集 藤原公任 京都市 出野曦山氏蔵 <b>【現】</b> 『下絵和漢朗詠集切 伝藤原公任筆』 《京都国立博物館刊『濤花集』所載》 『古筆学大成第一四卷』小松茂美著 講談社一九九二年六月(図一 一〇)	三四、和漢朗詠集 法性寺忠通 京都市 美濃部太三郎氏蔵 <b>【現】</b> 所在不明	三五、古筆集帖(月台)ノ内 家集切 坊門局 土橋嘉兵衛氏蔵 <b>【現】重文『月台』内「惟成集切」</b> 伝坊門局筆 東京国立博物館蔵 (手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a> ) この極札に「坊門局 風ふ希ハ」とあり、「e 国宝―書跡」に「惟成 集切」とある。『私家集大成第二卷 中古I』(明治書院 一九八二 年一月)に「惟成の現存諸本は、宮内庁蔵『惟成弁集』と伝坊門局 『惟成集』切の二伝本」とあり、極札にある歌は『惟成弁集』(二五、 二六)(五一―三頁)に見えるが、『惟成集』には見えない。藤原惟成 (九五三―八九)の官位は花山朝の時「正五位上権左中弁」。 『古筆学大成第一九卷』(小松茂美著 講談社一九九二年六月)に「筆 者は坊門局筆と伝えるが、坊門局の真筆といわれる『唯心房集』と は明らかに異筆」。
三六、和歌 黒流豆色紙 後京極良経 京都市 坂正臣氏蔵 <b>【現】</b> 所在不明				

三七、頼政家集 三井寺切 源頼政 京都市 服部七兵衛氏蔵 <b>【現】</b> 『頼政家集 三井寺切 伝源頼政筆』 『古筆学大成第一九卷』小松茂美著 講談社一九九二年六月(図三 三二)	三八、寛平歌合 宗尊親王 東京帝室博物館蔵 <b>【現】国宝『寛平御時后宮歌合(十卷本)』</b> 伝宗尊親王筆 東京国立博物館蔵 (寛平御時后宮歌合) 国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a> ) 「歌合の現存最古の伝本、陽明近衛家に伝来した「十卷本歌合」の一 部。この奥書に寛永一〇年(一六三三)淨知(生没年不詳)所持とあ り、その後舊会津藩主松平家の有に歸し、明治三四年(一九〇一)帝 室博物館(現東京国立博物館)が買い取った <sup>20)</sup> 」。	三九、古筆集帖(月台)ノ内 和泉式部集切 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵 <b>【現】重文『月台』内「和泉式部統集(上巻)切」</b> 伝藤原行成筆 東京国立博物館蔵 (手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a> ) この極札には「和泉式部集切」とあるが筆者名はない。 「和泉式部(九七七頃―一〇二七)の家集には正集・統集・辰翰本・ 松井本・雑種本がある。「統集」にはその書風が二つに分かれている ことから「上巻切」と「下巻切」(或いは「第一種」と「第二種」と 呼ばれ、これは「統集切・上巻切」。筆者は伝藤原行成 <sup>21)</sup> 」。	四〇、古筆集帖(月台)ノ内 和泉式部統集切 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵 <b>【現】重文『月台』内「和泉式部統集(下巻)切」</b> 伝藤原行成筆 東京国立博物館蔵
--	---	---	---

<p>(手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a>) 極札に「和泉式部続集切」とあり、これは「下巻切」。筆者は伝藤原行成。</p> <p>四一、古筆集帖(月台)ノ内 後拾遺和歌集巻第四 中院切 源実朝 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵</p> <p>【現】重文『月台』内「中院切」 伝源実朝筆 東京国立博物館蔵 (手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a>) この極札に「四条黄門定頼卿」としへぬる。中院切とあり、伝称筆者源実朝と異なる。「中院切の書写年代は、料紙・書の時代性から平安時代後期一二世紀初頭、鎌倉時代の実朝とは時代のずれがある。また実朝自筆の書状と比べても異筆<sup>2)</sup>」。</p> <p>四二、後拾遺和歌集 巻第九 中院切 源実朝 京都市 里見忠三郎氏蔵</p> <p>【現】 「後拾遺和歌集 中院切本 伝源実朝」 《京都国立博物館刊『濤花集』所載》 「古筆学大成第八巻」小松茂美著 講談社 一九八九年一月(図二五三)</p> <p>四三、古筆集帖ノ内 拾遺和歌集 巻第二 源俊頼 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内「拾遺和歌集」巻第二 伝源俊頼筆 五島美術館蔵 (『大手鑑』(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図七四))</p> <p>四四、古筆集帖ノ内 三宝絵 東大寺切 源俊頼 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内「三宝絵詞」 東大寺切 伝源俊頼筆 五島美術館蔵 (『大手鑑』(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図七五))</p> <p>四五、古筆集帖ノ内 拾遺和歌集 巻第二 源俊頼 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p>
--

<p>【現】重文『大手鑑』内「拾遺抄」巻第二夏 伝源俊頼筆 五島美術館蔵 (『大手鑑』(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図七三))</p> <p>四六、古今和歌集 巻第十七 民部切 源俊頼 京都市 服部七兵衛氏蔵</p> <p>【現】「古今和歌集」民部切 伝源俊頼筆 個人蔵 (『古筆学大成第二巻』小松茂美著 講談社 一九八九年一月(図二一九))</p> <p>四七、古筆集帖(月台)ノ内 後撰和歌集巻第七 烏丸切 藤原定頼 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵</p> <p>【現】重文『月台』内「烏丸切」 伝藤原定頼筆 東京国立博物館蔵 (手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a>) 極札に「世尊寺殿行成卿 あつ左ゆ見」とあり、伝称筆者藤原定頼(九九五―一〇四四)と異なる。「烏丸切・中院切・白川切後撰集」(日本名跡叢刊八九三)に「定頼には自筆書状一幅があり、この真筆遺品と「烏丸切」は同筆とは言い難い」。</p> <p>四八、古筆集帖ノ内 後撰和歌集 巻第四之切 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内「後撰和歌集」 伝後光厳天皇筆 五島美術館蔵 (『大手鑑』(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図一八))</p> <p>四九、古筆集帖ノ内 古今和歌集巻第十七 鶉切 藤原顕輔 京都市 土橋嘉兵衛氏蔵</p> <p>【現】重文『月台』内「鶉切」 伝藤原顕輔筆 東京国立博物館蔵 (手鑑『月台』国立博物館所蔵 e 国宝―書跡 <a href="https://www.emuseum.jp/">https://www.emuseum.jp/</a>)</p> <p>五〇、熊野懷紙 源通親 名古屋市 青木鎌太郎氏蔵</p> <p>【現】熊野懷紙 源通親筆 所蔵者名不詳 (『書道全集第一八巻』下中邦彦編集 平凡社 一九七一年七月(挿四〇))</p>
---

<p>五一、熊野懷紙 藤原長房 名古屋市 高橋彦次郎氏蔵</p> <p>【現】熊野懷紙 藤原長房筆 所蔵者名不詳</p> <p>〔書道全集第一八卷〕下中邦彦編集 平凡社 一九七一年七月（図六七）</p>	<p>五二、小大君集 僧西行 京都市 林新助氏蔵</p> <p>【現】小大君集 伝西行筆 個人蔵及び一部所在不明</p> <p>〔古筆学大成第一九卷〕小松茂美著 講談社 一九九二年六月</p> <p>〔濤花集〕には「小大君集」から三葉が断簡として収載。「五二ノ一」は現段階で所在を確認出来なかった。「五二ノ二」は『古筆学大成第一九卷』の（図一一二③）、「五二ノ三」は同（図一一二①）、所蔵者は両断簡ともそれぞれ個人蔵。</p>	<p>五三、後撰和歌集 卷第七 白川切 僧西行 愛知県 森川勘一郎氏蔵</p> <p>【現】後撰和歌集 卷第七 白川切 伝西行筆 MOA美術館蔵</p> <p>〔烏丸切中院切白川切後撰集〕（日本名跡叢刊八九）小松茂美監修 二玄社 一九八四年二月（八一頁）</p> <p>「白川切」「白河切」「江戸切」とも称す。</p>	<p>五四、四首歌切 僧西行 四日市市 熊沢一衛氏蔵</p> <p>【現】 所在不明</p> <p>未詳家集切 伝西行筆 《徳川侯爵『伽藍洞入札目録』（大正一五・一一東美）所載》</p> <p>〔古筆学大成第二〇卷〕小松茂美著 講談社 一九九二年六月（図一九）</p>	<p>五五、假名文 僧西行 大阪市 本山彦一氏蔵</p> <p>【現】 所在不明</p> <p>五六、内大臣家歌合 僧西行 東京市 伯爵渡邊昭氏蔵</p> <p>【現】重文『二十卷本歌合』 伝西行筆 個人蔵</p> <p>〔古筆学大成第二二卷〕小松茂美著 講談社 一九九二年六月（図一七〇）</p> <p>「永久三年十月廿六日『内大臣忠通前度歌合』」。</p>
---	---	---	--	--

<p>五七、古筆集帖ノ内 歌合切 藤原俊忠 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内『二十卷本類聚歌合』二条切 伝藤原俊忠筆 五島美術館蔵</p> <p>〔大手鑑〕（鴻池家旧蔵）大東急記念文庫 二〇〇四年八月（図八七）</p> <p>「十卷本歌合」のあと、藤原忠通（一〇九七〜一一六四）の力により編纂事業がなされて、「類聚歌合」又は「二十卷本歌合」と呼ばれる。二〇人以上の寄合書きとなるが、古筆家の鑑定はすべて藤原忠家（一〇三三〜九一）・俊忠（一〇七一〜一一二三）父子のどちらかの筆。忠家筆は「柏木切」、俊忠（俊成の父）筆は「二条切」と呼ばれる<sup>24</sup>。</p>	<p>五八、十四番歌合切 伊丹切 藤原俊忠 京都市 里見忠三郎氏蔵</p> <p>【現】皇太夫人班子女王歌合 柏木・二条切 伝藤原忠家・俊忠筆 個人蔵</p> <p>〔古筆学大成第二二卷〕小松茂美著 講談社 一九九二年六月（図五四）</p> <p>〔濤花集〕の表記と『古筆学大成』の表記が異なる。</p>	<p>五九、五首和歌 住吉切 藤原俊成 大阪市 男爵藤田平太郎氏蔵</p> <p>【現】『五首和歌』 住吉切 藤原俊成筆 藤田美術館蔵</p> <p>〔古筆名品抄（三）〕（日本名跡叢刊九七）小松茂美監修 二玄社 一九八五年一〇月（五〇頁）</p> <p>「藤原俊成（一一一四〜一二〇四）が「五社百首」を奉納、その内の住吉社に奉納した断簡を「住吉切」とよぶ。「文治六年（一一一九〇）云々」の奥書があり、俊成七七歳の筆跡<sup>25</sup>。</p>	<p>六〇、古筆集帖ノ内 千載和歌集卷第十五 日野切 藤原俊成 大阪市 男爵鴻池善右衛門氏蔵</p> <p>【現】重文『大手鑑』内『千載和歌集』日野切 藤原俊成筆 五島美術館蔵</p> <p>〔大手鑑〕（鴻池家旧蔵）大東急記念文庫 二〇〇四年八月（図八八）</p> <p>「文治四年（一一八八）奏覧本を俊成自身（七五歳）が清書。」</p>
---	--	--	---

六一、千載集断簡 日野切 藤原俊成 京都市 里見忠三郎氏蔵 【現】『千載和歌集』 日野切 藤原俊成筆 個人蔵 〔古筆学大成第九卷〕小松茂美著 講談社 一九八九年一月(図一六〇)	六二、古筆集帖ノ内 古今和歌集 卷第五 二条為氏 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵 【現】重文『大手鑑』内『古今和歌集』因幡切 伝二条為氏筆 五島美術館蔵 〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図九八)	六三、古筆集帖ノ内 古今和歌集 卷第十五 藤原為家 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵 【現】重文『大手鑑』内『古今和歌集』北野切 伝藤原為家筆 五島美術館蔵 〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図九五)	六四、古筆集帖ノ内 歌集切(集未詳) 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵 【現】重文『大手鑑』内『三十六人撰』 伝世尊寺伊経筆 五島美術館蔵 〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図五六)	六五、古筆集帖ノ内 和歌 世尊寺経朝 大阪府 男爵鴻池善右衛門氏蔵 【現】重文『大手鑑』内『和漢朗詠集』 伝世尊寺経朝 五島美術館蔵 〔大手鑑〕(鴻池家旧蔵) 大東急記念文庫 二〇〇四年八月(図六〇)	六六、国宝 歌仙像 三幅之内 三重県 専修寺蔵 【現】重文『女歌仙絵三図(小大君)』 専修寺蔵 〔書道全集第一八卷〕下中邦彦編集 平凡社 一九七一年七月(四八頁)
--	--	---	--	---	---

専修寺に伝わる女歌仙絵三図(後鳥羽院本)は伊勢・中務・小大君。これは小大君の図。

六七、国宝 泉涌寺勸縁疏 僧俊苧 京都市 泉涌寺蔵  
【現】国宝『泉涌寺勸縁疏』 俊苧筆  
〔荣西 俊苧〕(日本名跡叢刊六六)小松茂美監修二玄社一九八二年一〇月(六九頁)  
〔俊苧(一六六)一三二七)が泉涌寺造営のための喜捨を求めて草したもの、宋書風の書。』

六八、国宝 慈円僧正願文(伝春日表白) 慈円筆 京都市 曼殊院蔵  
【現】重文『紙本墨書慈円僧正願文(伝春日表白)』 慈円筆 東京国立博物館蔵  
〔願文〕国立博物館所蔵e国宝―書跡 <https://www.emuseum.jp/>  
〔昭和四年当時曼陀院蔵、現東京国立博物館蔵〕。

下冊

三十六人家集和歌 伯爵 大谷光昭氏蔵  
【現】国宝『西本願寺三十六人家集和歌』 西本願寺蔵  
〔書道全集第一四卷〕下中邦彦編集 平凡社 一九五六年九月(二六―二七頁)  
〔西本願寺本〕の筆者は書風により二〇人の寄合書きとされる。書風により(一)番目の書者から順次(二)番目の書者とし、判明あるいは定説となっている筆者名を記す。  
〔貫之集〕〔貫之集上〕〔一番目の書者〕藤原定実筆(推定)  
〔貫之集下〕〔二番目の書者〕藤原定信筆  
〔躬恒集〕〔三番目の書者〕承香殿女御藤原道子筆(推定)  
〔伊勢集〕〔四番目の書者〕  
〔赤人集〕〔六番目の書者〕  
〔忠岑集〕〔一番目の書者〕  
〔斎宮集〕〔四番目の書者〕  
〔重之集〕〔二番目の書者〕  
〔元輔集〕〔七番目の書者〕

〔元眞集〕 (一八番目の書者)  
 〔能宣集〕 〔能宣集上〕 (五番目の書者)  
 〔能宣集下〕 (五番目の書者)  
 〔忠見集〕 (一九番目の書者)  
 「昭和四年当時所蔵者伯爵大谷光昭氏、現在西本願寺蔵である」。  
 〔濤花集〕 目次では旧字体が使われているが、小稿では新字体で表した。

### 三、おわりに

以上のように、『濤花集』について、その発行年と現在という形で見えてきた。この内、上冊の中で全く所在の掴めなかったものが二葉「三四、和漢朗詠集」と「五五、假名文僧西行」あり、『濤花集』等の刊行物に所載とあって、所在不明が七葉「一八、古今和歌集」・「二八、小大君御蔵切」・「三二、朗詠集切」・「三三、和漢朗詠集」・「三六、和歌黒流豆色紙」・「四二、後拾遺和歌集中院切」・「五四、四首歌切僧西行」であった。またもつと小さい断簡に分割され、一部が所在不明というものも二葉「二八、小大君御蔵切」・「五二、小大君集僧西行」あり、合計一葉。これは上冊六十八葉の約一六パーセントにあたる。

『濤花集』発行の昭和四年(一九二九)と、現在の平成三〇年(二〇一八)とでは八十九年の隔たりがあり、当然変更があつて然るべきと思われた。それは、その間に第二次世界大戦という大きな出来事があつたからであり、発行年と現在の隔たりを痛感しないではいられない。しかし、そのような時代を経ても『濤花集』には現在があり、掲載されている古筆は現在もなお受け継がれていることがわかったのである。

### 〔注〕

- (1) 中村直勝「歴史と地理」『史学地理学同致会編輯』(第二十四卷第四号) 肇文社星野書店 昭和四年(一九二九) 十月一日(三七〇)～三七一頁
- (2) 拙稿「『濤花集』の基礎的研究」『佛敎大学大学院紀要』文学研究科篇 第四十五号(二〇一六年九月三〇日受理) 二〇一七年三月一日(二六五)～二八二頁
- (3) 小沢正夫・松田成穂校注『古今和歌集』新編日本古典文学全集11 小学館 一九九四年一月(一一五頁)
- (4) 奥村恆哉校注『古今和歌集』新潮日本古典集成 新潮社 一九九一年六月(一〇二頁)
- (5) 古谷稔解説『石山切伊勢集』(日本名筆選三八) 二玄社 一九九四年六月(五六頁)
- 〔昭和四年に寺が学校設立に要する資金繰りのために「貫之集下」と「伊勢集」の二帖を分割したのである。それぞれ断簡は、一枚の料紙の表裏を剥離して二面に解体して新たに茶席の床を飾る掛幅などに仕立てられ、現在では日本国内のほか米国などにもその所蔵が知られている。〕
- (6) 小島孝之「成城大学所蔵古筆手鑑『も、ちどり』概要」『成城國文學論集 第三十五輯』成城大學大学院文學研究科 二〇一三年三月(一一〇頁)
- (7) 小松茂美著『小松茂美著作集 第二卷』『平安朝伝来の白氏文集と三跡の研究 二』旺文社 一九九七年一月(三三八頁)
- (8) 『手鑑』(鴻池家旧蔵)「大東急記念文庫 善本叢刊 中古・中世篇 別巻二」大東急記念文庫 二〇〇四年八月
- (9) 『書道藝術第二二卷』中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(二〇二頁)
- (10) 『書道藝術第二二卷』中田勇次郎編集 中央公論社 一九七五年八月(二二三頁)
- (11) 『小野道風集』(日本名筆選三八) 古谷稔解説 二玄社 一九九九年八

- 月(六五頁)
- (12) 『本阿弥切』(日本名筆選二九) 下坂守解説 二玄社 二〇〇二年五月(五四頁)
- (13) 『小鳥切』(日本名筆選二四) 島谷弘幸解説 二玄社 二〇〇〇年四月(六六頁)
- (14) 『行成 本能寺切』(和漢墨寶選集第一二卷) 飯島春敬編・著 書藝文化新社 一九九〇年一〇月(解説三頁)
- (15) 『古今和歌集』奥村恆哉校注 新潮日本古典集成 新潮社 一九九一年六月(二五五頁)
- (16) 『古筆名品抄(二)』(日本名跡叢刊九五) 小松茂美監修 二玄社 一九八五年八月(八二頁)
- (17) 『御堂関白集全釈』(私家集全釈双書三八) 平野由紀子著 風間書房 二〇一二年三月(三一頁)
- (18) 『古筆名品抄(二)』(日本名跡叢刊九六) 小松茂美監修 二玄社 一九八五年九月(九二頁)
- (19) 『色紙法華経卷八』(日本名跡叢刊七八) 小松茂美解説 二玄社 一九八三年二月(八八頁)
- 「料紙に金砂子を撒き、さらに金銀泥で装飾下絵を施した一二世紀初め作品」。
- (20) 『寛平御時后宮歌合』(日本名跡叢刊八) 小松茂美監修 二玄社 一九七七年五月(七六頁)
- (21) 『和泉式部続集切』(日本名筆選二五) 島谷弘幸解説 二玄社 二〇〇〇年四月(四九頁)
- (22) 『烏丸切・中院切・白川切後撰集』(日本名跡叢刊八九) 小松茂美監修 二玄社 一九八四年二月(二〇六頁)
- (23) 『烏丸切・中院切・白川切後撰集』(日本名跡叢刊八九) 小松茂美監修・二玄社 一九八四年二月(二〇五頁)
- (24) 『古筆名品抄(二)』(日本名跡叢刊九六) 小松茂美監修 二玄社 一九八五年九月(一一二頁)
- (25) 『古筆名品抄(三)』(日本名跡叢刊九七) 小松茂美監修 二玄社 一

九八五年九月(二〇八頁)

(いちはし みよこ) 文学研究科文学専攻修士課程修了(研究員)

(指導教員・黒田 彰 教授)

二〇一八年十月一日受理